

東京春祭ディスカヴァリー・シリーズ vol.11

ジョルジュ・ビゼー

没後 150 年に寄せて

曲目解説

文・落合美聡

ビゼー：組曲《アルルの女》

《アルルの女》は、戯曲の付随音楽として 1872 年に作曲された。初演時の評価は振るわなかったものの、後にビゼー自身がオーケストラ用の組曲として再構成し、高く評価されるようになる。さらに、ビゼーの死後、友人のエルネスト・ギローが第 2 組曲を編曲し、広く知られる名曲となった。

本公演で演奏される〈メヌエット〉は、第 2 組曲の第 3 曲にあたり、《美しいパースの娘》第 3 幕の二重唱の旋律をもとにしている。本来はフルートとハープのための楽曲だが、今回はフルートとピアノの二重奏でお楽しみいただく。

ビゼー：歌劇《美しいパースの娘》

1867 年にリリック座で初演された《美しいパースの娘》は、前作《イヴァン 4 世》が劇場の予算上の問題で上演中止となり、その代替として劇場支配人から委嘱された作品である。初演時の評価は芳しくなかったが、ビゼーの精巧なオーケストレーションは称賛された。

本作はスコットランドを舞台に、ヒロインのカトリーヌと鍛冶職人のアンリの恋が、ロスシー公爵やジプシーのマブらを巻き込んだ騒動の中で描かれる。第 2 幕の〈セレナード〉では、アンリがマブとの関係を疑うカトリーヌの家を訪れ、彼女への想いを歌う。抒情的な旋律が印象的な一曲である。

モーツァルト（ビゼー編）：歌劇《ドン・ジョヴァンニ》

イタリア留学後、ビゼーは生計を立てるために積極的に編曲活動を行なった。その一例として、モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》のピアノ独奏版がある。この編曲は、1866 年にイタリア座、オペラ座、リリック座での《ドン・ジョヴァンニ》の再演に合わせて制作され、ウージェル社から楽譜が出版された。モーツァルトの名作をピアノ独奏で表現する、ビゼーの卓越した編曲技術を堪能できる作品となっている。

ビゼー：歌劇《真珠とり》

1863 年にリリック座で初演された《真珠とり》は、イタリア留学後に最初に劇場支配人から委嘱され、パリの主要な歌劇場で初めて上演された作品である。初

演時、批評家から大きな関心を集めることはなかったが、作曲家のベルリオーズはこの音楽を高く評価している。

本作は、セイロン島（現在のスリランカ）を舞台に、漁夫の頭領であるズルガ、友人のナディール、そして彼らの想い人であるレイラを巡る物語。ナディールが、漁夫の安全を祈るために村を訪れた女祭司がかつて恋をしたレイラであることに気づき、彼女への想いを歌う「耳に残る君の歌声」、ズルガとナディールがレイラを巡る恋敵だった過去を語り、友情を誓い合う「聖なる神殿の奥深く」の二曲によって、二人の心情が深く描かれる。

ビゼー：歌劇《カルメン》

1875年にオペラ・コミック座で初演された《カルメン》は、台詞を伴うオペラ・コミックの形で作曲されたが、それまでの同ジャンルの作品とは一線を画す内容であった。ヒロインが舞台上で殺害される展開は当時の聴衆に大きな衝撃を与えたものの、現在ではビゼーの代表作として挙げられるほど評価は高い。

その魅力は異国情緒と親しみやすい旋律にある。〈ハバネラ〉、〈セギディージャ〉、〈ジプシーの歌〉ではスペインの情熱的な雰囲気、〈花の歌〉ではフランスの抒情的な趣が、〈闘牛士の歌〉では闘牛士の勇敢な精神が表現される。全体を通して、作品の多彩な魅力を存分に味わうことができる選曲となっている。